

まえがき

まず、この本を二ページ開いていただいたこの出逢いに感謝します。

このページを開いたとき、あなたは西暦二〇二二年以降を生きているのだらうと思います。この出会いが、若い世代あるいは人生経験を積まれた先輩方の手に乗っているといいなと思いつながら、今ここに書き綴っています。二〇二〇年この執筆を始めた頃、時は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による大きな社会現象や医療問題などを抱え、これからの大きな課題が見えてきたでしょうし、自粛期間を通しての仕事や家庭環境、関係性の見直しを行った方もいらっしゃるのではないでしょうか。個々の健康状態を調整するいい期間だった方もいるかと思えますし、価値観の違いや方向性の違いなどが見えて出会いや別れも多かった年ではないかと予想されます。

二〇二〇年は数字で言えば『4』の年を過ごしていました。無意識レベルで基盤や安心とは何かを問われ、どこでどのような人たちと関わっていくのかを見直す年でもありました。目の前に現れ

たなんらかの問題で自分の本当の気持ちが再確認される。『風の時代』に入ったこともあって、ひとしずくが与える影響について考えさせられる時代がやってきたわけです。風って突然吹いてその辺にあつたものを拾い、あてなく飛ばしていく。覆いかぶさっていたちりや埃を巻き上げて、その下に葬られていたものを明るみに出してくれる。心もからだも一掃して、さてこのゴミをどう処理しましょうと知恵を使わなければいけなくなっていたそれぞれの足元の見直し期だったのだろうと思います。

『5』に当たる二〇二二年は、定めた目標を目指して経験を積み、より深い知恵や自由などを手にしていく。イメージで言うならば、風に乗る……まるでサーフィンの波乗りのように風に乗る訓練をしなければならぬ。未熟なときには寄りすがり、支えになるものも欲しい。でも風乗りに慣れてくれば手を放して、もつと離れたところから見えてほしいという自立ともいえる欲が出てきます。もつと自由を求めて「もう一人でできるから」とクールに生きたくはならず。そうして依存と自立の狭間にいながらも、自分らしく歩いていくリズムをつかんでいくのです。

そして二〇二二年は、『6』の年。自立を決断した人たちは、それぞれの場へと歩き始めるために手放さなければいけないことが出てきます。これまで親しいと思っていた人やグループなどとの関係に少し違和感を抱いたり、価値観の違いやどこまでも平行線と思える関係も見えてきたりするでしょう。そのときにはなんとかしようかと戦うのではなく、手放す、離れるといった方法で自分の道へと足を進めることになるでしょう。そういう意味では小さな別れも起きてきそうですね。より自分らしく気の合った人たちと同じ方向を目指せるように、意識や心のリズムも変化していくでしょう。

この地球上の営みにおいては、とても神秘的な現象や力、個人の予想をはるかに超える『不思議』や『奇跡』に遭遇した人もいます。そのたびに見えない力の為す業に一喜一憂したり、度肝を抜かれる驚きを抱えたりすることもあるでしょう。いったい何がそれらを引き起こしたのかについては未だ誰にも説明できていない神秘ですが、そうした大きな力の中に包まれていながらも、いつの間にか心は俗世間にどっぶりつかってしまふ。目先の問題をまるで自分一人が抱えているかのように追い詰められ、ストレスや苦悩を生むリンク状態。視野が狭くなってしまつて、自分はとても大きな存在なのだと思ひ意識は塗り替えられているかもしれない。

そろそろ人間の欲や都合に偏った概念から、宇宙意識レベルへともう一度根本から『生きる』ということを見直す時代がやってきたように思えます。

『北風と太陽』という童話があります。旅人の洋服を脱がしたほうが勝ちだと競い合った北風と太陽のお話です。洋服を脱がせるために風で飛ばしてやろうとする北風と、暑くなって自分から衣服を脱ぐことを選択させる太陽の競い合いなのですが、あなたはどちらが勝ったと思いますか。今はそれと同じく変化させようとする風の力が働いています。そうした変化のときには、つい過去や古い習慣にしがみついて力が入り、変化させられることに不安を抱いて、執着や抵抗をする力が働いてしまいます。でもこれでは素顔はますますこわばってしまいます。だからといって他力で脱がせてもらうにしても何を信用していいのかわからない。そこで最後の出番が太陽です。ここでいう太陽とは、外部の存在ではなく、あなたらしさという輝きがその意味を成します。あなたが心から喜びや楽しさを味わうことができれば自然と輝きを増してきます。自分の内面から湧きあがる輝きを風が……新たなステージへと運んでくれるのです。あなたの目の前にはそっと押しつみれば開けることのできるドアがあります。カギを開けなければ通れないのだという刷り込みを一日も早く

解き、古い自分を脱いで光の世界へと足を一步踏み出してみましよう。

この出逢いがさまざまな色眼鏡を外してくれる、そんなきっかけとなりましたら幸いです。